

## 新たな扉が開かれる・吉岡伝道所発足 1957

### はじめに

仙台教会 70 年の歴史の中で、二桁の受浸者を生んだ年が 11 回あります<sup>1</sup>。その内の一回である 1956 年（昭和 31）の 4 月 29 日（日）に、仙台教会で 6 名の男子青年がバプテスマを受けました。「現在会員」の渡邊真人さん（当時 17 歳）や、藤沢良和さん（当時 18 歳）も含まれます。今もお元気に教会生活を送られていますので、仙台教会初期時代の「歴史よもやま話」をお伺いする機会を設けるのも有意義ではないでしょうか。ぜひ実現したいものです。

### 1. 吉岡伝道のきっかけー富谷での家庭礼拝

さて、その 4 月 29 日に受浸した 6 名のお一人に、阿部信行さんという青年がいました。信行さんは富谷の方で、仙台で学生生活を送る中、仙台教会に導かれバプテスマを受けました。真面目な信仰生活は、普段の生活態度にも良い影響を与えたようです。彼の母親阿部花子さんはご子息の変化に感激し、1956 年（昭和 31）のある日曜日、仙台教会の礼拝に出席され、礼拝後に関谷定夫牧師とグラント宣教師に面談を申し出られました。そして信行さんに深く心を寄せ、お世話や指導を行っていた両師へ感謝の思いを伝えると同時に、こんな申し出をされたのです。「関谷先生とグラント先生がわが家で礼拝を行うことは出来ないでしょうか？ 私たちの近くには教会が全くないのです」<sup>2</sup>。

花子さんはクリスチャンではありませんでしたが、キリスト教に大変興味を持っておられました。またご主人の阿部利吉さんは、富谷の自宅で開業しておられた医師で、中学時代<sup>3</sup>にキリストを信じる信仰に導かれたものの、その後はアクティブな信仰生活は送っておられなかったようです。しかし、キリスト教には強いシンパシーを抱いていました。ご子息のバプテスマをきっかけに、信仰の灯が再び明々と輝き出し、家庭礼拝の申し出に繋がったのではないかと想像します。

グラント宣教師と関谷牧師は、これは自分たちが祈り求めてきたことに主がお応えくださり<sup>4</sup>、新しい働きの方を示して下さったのだと確信し、喜んでその申し出に応じることにします。最初の訪問の際は、あまりもの悪路で車の車軸まで泥に埋ま

り、近所の農家にお願ひし馬で車を引き出してもらい、ようやく富谷の阿部宅にたどり着いたということです。二回三回と家庭礼拝を続ける中で、阿部夫妻は患者さんやご近所の方にも主を証しして、人々を集会へ招くようになりました<sup>5</sup>。

2カ月ほど家庭礼拝を続けた後、利吉さんは近隣の大きな町である吉岡に病院を移転させることとなりますが、富谷の阿部宅で行ってきた集会も吉岡に移動し継続することを望んでいました<sup>6</sup>。当時吉岡の人口は2万人以上あったようですが、これまで一度もキリスト教の宣教が行われたことのない町でした。「主が自分たちを吉岡の人々のところに遣わそうとしておられる」ということを確信したグラント宣教師と関谷牧師にとって、利吉さんの希望を叶えることはイコール、主のご計画に従うことそのものでした。

## 2. 吉岡での集会開始

吉岡に新病院が開設されたのは1957年（昭和32）2月頃のようにです。その開所式で阿部利吉さんは病院長として挨拶のスピーチを行います。その内容はクリスチャンとしての力強い証し以外の何ものでもありませんでした。普通に考えれば場違いな挨拶ということになりますが、一人のクリスチャン医師として、吉岡に開設した新病院の役割と使命を明確にしたのです。次のような内容でした。

「大戦中、私はオランダをはじめとする、様々な国の兵士が収容されていたジャワ島の捕虜収容所で働いていました。捕虜が何よりも必要としている薬を入手するため、私は最善を尽くしました。時には足りない貴重な物資を密輸することさえありました。そのため私は懲戒を受け、昇進の望みがなくなりました。軍籍を離れた時、私の階級は入隊時と同じだったのです。私はクリスチャンだったので、助けを必要とするすべての者を助けたかったです。私は皆様が私を必要とする時、いつでも、どこでも、助けるために吉岡に来たのです」<sup>7</sup>。

新病院での礼拝は、毎週病院の小さな待合室で行われました。ただ病院の業務が拡大し患者の数も増えるとともに、待合室には常に人が出入りするようになったため、どうしても集会のための別な建物が必要となり、そのことを覚え祈り始めました。そしてその祈りを主はお聞き届けくださり、病院の近くの土地の所有者が、教会が吉岡での日曜学校や幼稚園開設にも関心を抱いていることを知ると、特別割引価格を提示してくれたのです。また仙台に駐留していた米軍の中の小さなバプテス

トのグループは、教会の特別な事業のために 500 ドルの献金を約束してくれていたため、その資金と仙台教会や個人の資金とを合わせて土地を購入することができました。会堂は駐留軍の建物を改造し移設することとし、その費用のやりくりには閉鎖間近の駐留軍に残っていた最後のバプテスト信者ハンク（ヘンリー・フケイ准尉の愛称）とその奥様が、献身的な協力をしてくれました<sup>8</sup>。またハンクの上司は、駐留軍の活動縮小に伴って発生する余剰備品を、キリスト教団体に払い下げることができるよう取り計らい、補給担当役であったハンクは、バプテストへの払い下げに関して大いに便宜を図ってくれました<sup>9</sup>。

このようにして 1957 年（昭和 32）5 月に吉岡に会堂が与えられ、幼稚園が開設され、そこをベースに吉岡伝道が本格化していきます。但し、仙台教会が吉岡伝道所を設立した正確な日付や教会での総会手続きに関しては、記録がなく特定できませんでした<sup>10</sup>。なお阿部夫妻と佐々木タミ子さんのバプテスマは、1958 年（昭和 33）10 月 5 日（日）に行われました<sup>11</sup>。吉岡伝道所最初の正式メンバーの誕生です。

### 3. 無医村地区での医療伝道の試み

仙台教会の古い週報に目を通していた時、吉岡伝道に関連するある記事が目に残りました。それは 1964 年（昭和 39）5 月 24 日の週報です<sup>12</sup>。報告欄に次のように書かれています。

「今日の礼拝后（2 時~5 時）吉岡近在の無医村・嘉太神地区の人々のために、第一回医療伝道を行います。これは、阿部兄・吉永兄らの発意と協力による愛のわざであって、阿部夫人、牧師の他、乗車人員の関係で、今回は下記に見られる諸兄弟に限られることになりましたが、今後のためにもぜひこのために御加禱をおねがいいたします。

診療 阿部利吉兄（医師）、吉永馨兄（医師）、児玉茂美兄（医学生）

看護 阿部姉、斎藤民子姉（看護学生）、菊田瑠美姉（大学生）

顧問 鎌田栄子姉（園教諭）、天野牧師 』

その後何回継続したのかは、残念ながら週報で確認することは出来ませんでした。仙台教会が無医村での医療伝道に携わった歴史を持つことに、大いに感銘を受けました。このことも吉岡伝道史のひとコマとして、忘れずに語り伝えていきたいものです。（文責：小林孝男）

1 年毎の受浸者数は「日本バプテスト仙台基督教会歴史年表の原表」参照

年間二桁の受浸者が与えられた年は具体的には、幼稚園が開園し新会堂も建築された 1954 年(昭和 29) 23 名、教会組織を行った 1955 年(昭和 30) 20 名、翌 1956 年(昭和 31) 17 名、吉岡伝道を開始した 1957 年(昭和 32) 16 名。天野五郎牧師時代が始まった 1964 年(昭和 39) 11 名、南光台伝道所を開設した 1966 年(昭和 41) 12 名、1967 年(昭和 42) 13 名、1968 年(昭和 43) 10 名。金子純雄牧師時代に大富伝道所が発足した 1992 年(平成 4) 10 名、1993 年(平成 5) 13 名、そして日本バプテスト連盟信徒大会に、仙台教会から青年伝道隊を派遣した 1994 年(平成 6) 13 名

2 『主の息吹の中で』 68~69 頁

3 資料(1987/11/15\_東北学院時報 445 号\_阿部利吉逝去)、東北学院中学部出身

4 記念誌『ねむの木に寄せて』(吉岡バプテストひかりの園運営委員会、2011) 33 頁

この記念誌に寄稿した大槻國彦師(志免バプテスト教会名誉牧師)によれば、グラント宣教師は大槻師の故郷鶴巣村(当時)で伝道集会を開催したり、また同村に幼稚園設立を計画したりと、県北での伝道構想を祈り求めているようである。

5 『主の息吹の中で』 69 頁

また、『ねむの木に寄せて』32-33 頁には、大槻國彦師がまだ少年の頃、急病で倒れた祖父のために、鶴巣から馬をひいて富谷の阿部利吉医師宅まで往診をお願いに行ったエピソードが書かれている。

6 『主の息吹の中で』 69 頁

7 同上 71 頁

8 同上 74~75 頁

9 同上 76 頁。遊具一式、折りたたみ椅子 60 脚、子供用の椅子とテーブル、ピアノ、小さな講壇等の払い下げを受ける。尚、仙台の駐留軍は 1957 年 11 月までに完全に撤退した。

10 吉岡伝道所設立は、会堂が与えられ、また幼稚園が創立された 1957 年(昭和 32)5 月頃と考えるのが妥当であろうが、仙台教会には吉岡伝道所設立に関する記録が一切保存されていないので断定はできない。

1957 年といえば、仙台教会は誕生 2 年目であり、まだまだ内部を整えることに勢力が注がれていた時期である。また、関谷定夫牧師から大沼上牧師へとバトンが渡された時期でもある。仙台教会には外に目を向けるだけの信仰的な余裕はまだ十分には備わっておらず、吉岡伝道に関してはグラント宣教師と阿部利吉夫妻の信仰的熱意が先行し、教会としては信頼をもって二者に委ねるという状況があったのではないだろうか。そしてそのことが、後の時代に教会と伝道所間に微妙な距離感が生じてしまう遠因となった、と考えるのは的外れだろうか。

11 『主の息吹の中で』 69 頁には、「二人は数カ月後に共にバプテストを受け・・・」と記載されている。富谷での家庭礼拝開始後「数カ月後」ということであれば、1956 年後半から 1957 年初めということになるが、ここでは仙台教会の教籍記録に従うこととする。

12 週報(1964/05/24)



吉岡伝道所の会堂(1957 年献堂)